

S-7

感情の基礎研究からセラピーを考える
—基礎心理学と人間性心理学の交差IV—企画者：宮田 周平¹⁾司 会：久羽 康²⁾話題提供者：藤木 大介³⁾、上田 紋佳⁴⁾指定討論者：榎本 光邦⁵⁾、宮田 周平¹⁾

1) 鎌倉女子大学 児童学部 子ども心理学科、2) 駒澤大学 文学部 心理学科、

3) 広島大学大学院 教育学研究科、4) 岡山大学大学院 教育学研究科、

5) 群馬パース大学 教養共通教育部

keyword：感情、人間性心理学、交差

【はじめに】本企画は人間性心理学に基礎心理学を交差させることによって新たな理解やステップを目指すものである。これまで人間性心理学的なセラピーを認知過程や動機づけといった基礎心理学の視点から捉えなおし、人間性心理学的認知モデルの提起を行った(宮田ら, 2016; 宮田ら, 2017; 宮田ら, 2018)。その中で、基礎心理学と人間性心理学では感情の捉え方が異なっていることが明らかになった。感情は心理学の主要な研究対象の一つであり、基礎心理学では特に感情の機能、進化、発達、認知的なプロセスに関連する研究が見られる。一方で、クライアント中心療法やフォーカシングでは感情自体と言うよりも感情を含む体験過程全体への理解が重視されている。本企画では感情をテーマとして、まず基礎心理学の立場からの発表を行い、それに対して人間性心理学や折衷派のセラピストの立場から議論を進めていく。発表者や参加者にとって人間性心理学やセラピー、感情への新たな理解のきっかけになればと考えている。

【話題提供】

話題提供1

物語の登場人物の感情状態を推論し共感する過程

(藤木 大介)

物語の登場人物の感情状態を推論し共感する過程について、どこまでが無意識的、自動的に生じるのかを検討した研究(藤木・若杉・櫻野・岩本・島田, 2017)について紹介する。これに先立つ研究では、過酷な状況に置かれた人物について書かれた文章を読み、その

際に生じる共感について調べている。ここでは、他者の感情をそのまま再現するタイプの共感は無意識的に起こり、その人物の置かれた状況に対する義憤などの共感は無意識的に起こるとされた。これに対し本研究では、この文章の読解中に自動的に生じる登場人物の感情の推論と、2種類の共感との関係を検討した。その結果、感情推論と2つの共感とは異なる振る舞いをする場合があり、いずれの共感も無意識的に生じている可能性があるとした。

話題提供2

不安と抑うつ合併・共存

(上田 紋佳)

昨年度の自主企画で、「不安認知モデルからみた人間性心理学的認知モデル」と題して指定討論を行った際に、基礎研究と人間性心理学で不安の捉え方が異なることがわかった。そのことを踏まえて、本発表では、不安と抑うつ合併・共存(comorbidity)についての基礎心理学的研究を概観し、基礎心理学と人間性心理学の交差によって、感情について、新たな理解を目指す。不安と抑うつは精神医学の基本的な概念ではあるが、不安と抑うつは様々な様態で重複することはよく知られている。近年の不安と抑うつ共存研究では、Cummingsら(2014)が提案した多重経路モデルが主流となりつつある。不安症である若者はうつ病のリスクが高いといった疾患の経路の観点から、共存について捉えようとする考え方である。話題提供では、この多重経路モデルの枠組みから、近年の知見を紹介し、感情について議論したい。